

高齢者のグループリビングにおける住人の生活意識に関する研究

—住人を対象にしたアンケート調査から—

○ 立教大学大学院 星野 友里 (008879)

キーワード：グループリビング、高齢期の住まい・住まい方、地域居住

1. 研究目的

今後のひとり暮らし高齢者世帯の増加に際し、これまでの血縁や地縁に代わる新たな関係性の構築が期待されている。例えば、血縁関係のない高齢者の集住、すなわち「グループリビング」（以下、GL）もその一つである。ところが、住人の相互扶助といったイメージに反し、「入居時に負担する費用が最適だったから」がGL入居の一番の理由に挙げられるなど（久保木ら 2010）、実際はGLを意識していない人が一定数いる。GLは誰かに与えられるものではなく、住人がその必要性を理解し、そのための行動を積み重ねていくことで形になっていく。すなわち、GLの中のコミュニティ形成や住人の参加が進まない一因は、彼らが自分たちの住まいをGLだと意識していない点にあるのではなからうか。そこで、本研究は、GLの住人を対象に、入居のきっかけや期待項目、GLの理解度、GLの中で何らかの役割を担うことについてなど、基礎的な事柄をアンケート調査し、何がGLの障壁になっているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

GLの住人を対象にした研究は過去にも存在しているが、多くは満足度等を尋ねたものである。対して本研究は、住人のGLに対する意識を尋ね、それを踏まえGLの課題と在り方を考察したものである。具体的には、財団法人JKAの「高齢者生き生きグループリビング支援事業」（2005～2010年度）によって生まれた高齢者生活共同運営住宅（高齢者生き生きグループリビング）12ヶ所の住人69名を対象に質問紙による郵送調査を実施し、欠損値の多い1名を除いた計47名の回答を分析した（回収率69.6%・有効回答率68.1%）。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会「研究倫理指針」および「立教大学コミュニティ福祉学部・研究科倫理指針」に基づいて実施した。本研究の計画は立教大学コミュニティ福祉学部・研究科倫理委員会で承認を得ている（2013年8月30日付）。

4. 研究結果

<回答者の概要> 男女比：男性7名（14.9%）・女性40名（85.1%）

平均年齢±SD：83.3±7.8歳（n=46） 平均要介護度：要支援2（n=42）

<基礎項目> GLを知ったきっかけは「友人・知人からの紹介」（18名）、「家族からの紹介」（10名）、「自分で住み替え先を探していた」（9名）が多く、この他の選択肢を選んだ人はいずれも1～3名と少数だった（MA）。GL入居にあたり期待した点は食事の提供などの「生活支援」が31名と最多で、「見守りによる安心・安全」（26名）、「自由な生活」（24名）、「設備・環境」（21名）、「住人同士のコミュニケーション」（18名・以下、コミュニケーション）と続き、「生活共同運営」と「地域交流」は5名に選ばれた（MA）。

今の住まいがGLだということは、9割近くが「よく知っている」（26名）ないしは「ある程度知っている」（13名）と答えたが（n=45）、それが「生活共同運営」の要素を含む

ことを知っているかまで踏み込むと、「よく知っている」が14名に減少し、その分「ある程度知っている」が22名に増加した(n=37)。そのため、GLにおける役割の有無について質問すると、何らかの役割を「持ちたい」あるいは「機会があれば持ちたい」と回答したのは12名と数少なく、「あまり持ちたくない」18名、「持ちたくない」10名と、役割を持ちたくない人の方が多かった(n=40)。

なお、「役割を持っている」と答えた人にはその具体的な内容を記入してもらったところ、会計やコーディネーターなどの「役職」から、夜間の見守りや食事の後片づけといった生活援助、加湿器の管理や草花の手入れといった環境整備まで、多岐にわたる分野で各々が自分の「役割」を認識していることが分かった。特徴的なのは、役割を持ちたくない人が半数以上を占める中、役割があると答えた人は幾つもそれを挙げていた点であり、なかには自分を「ボランティア」と位置付けている人もいた。

とはいえ、住人のGLに対する評価は総じて高く、「非常に満足している」(14名)と「ある程度満足している」(28名)を合わせると、約9割がGLに満足している(n=46)。この人たちは「生活支援」(30名)、「自由な生活」(24名)や「見守りによる安心・安全」(24名)を期待し、GLに入居している。対して、GLに「満足していない」(1名)・「あまり満足していない」(3名)人は皆、介護認定を申請しておらず、「生活支援」を選んだ人はいなかった。むしろ、このうちの3名はGLに「コミュニケーション」を期待していたが、人づき合いの難しさを強く感じ、引越しを考えることがよくある。また、人間関係については、GLに満足していると答えた人からも否定的な意見が多く寄せられる結果となり、「人間関係が一番難しい」(原文ママ)や「あまり人がよくない」など、自由記述欄の大部分を占めていた。

5. 考察

本研究における住人のGLに対する評価は極めて良好だったが、実際はGLをよく知らないで生活している人が多く、「役割」が一部の住人(若年層が中心)に偏っている傾向がある。筆者がGLの運営法人に聞き取り調査を行った際も、多数の年長者に対する気配り・目配りを負担に感じ、GLを退去した人がいたと聞いた。比較的健康であっても、その人も同額を支払う「住人」の一人に変わりなく、長期的な視点に立てば、運営法人およびその他の住人のフォローが望まれる。

加えて、入居者10名前後という規模の小ささから自ずと接触頻度が高くなり、住人同士で摩擦が生まれている様子である。本研究が対象としたようなGLは、仲間内で始めたものではなく、運営法人が見ず知らずの高齢者を集めて作ったものであり、関係の構築・維持には一層の配慮を要する。しかし、GLにはスタッフが常駐せず、一度入ると、その後の生活は住人一人ひとりの裁量に任されるところが比較的多い。ゆえに、入居後の不応や住人同士の衝突を避けるためには、事前に体験宿泊を経るなどして、GLの理解、協調性の有無や既存の住人との相性の良し悪し等に基づき、入居検討者本人はもとより、運営法人側も入居を慎重に判断するべきである。

文 献 久保木修平・川岸梅和・北野幸樹・永井悠次郎(2010)

「グループリビングに関する研究(その2)ーグループリビングの周辺環境についてー」

『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)』: 1445-1446

付 記 本稿は2014年度「立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金」の助成を受けて実施した研究の一部である